

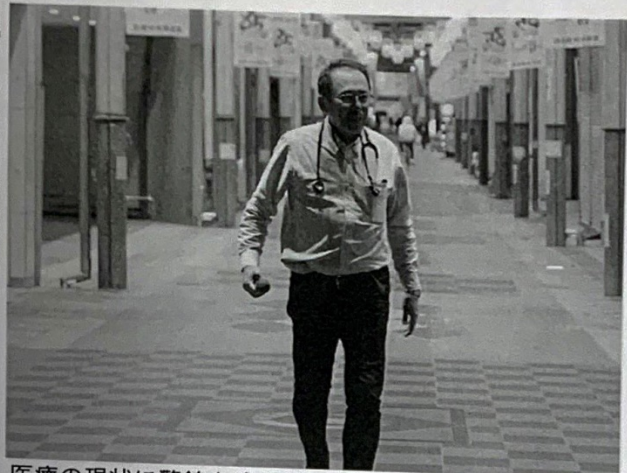


けったいな町医者

2020年/日本/ドキュメンタリー/1時間56分/監督:毛利安孝/出演:長尾和宏/ナレーション:柄本佑/配給:渋谷プロダクション

フレンドリーに真剣に 命の現場に寄り添う在宅医

「けったいな町医者」は「いぢびり」でもある。「けったい」も「いぢびり」も関西人でなければその微妙なニュアンスは伝わ



©「けったいな町医者」製作委員会

医療の現状に警鐘を鳴らし、在宅医になった長尾医師。24時間体制で往診要請に応じる彼の日常に密着したドキュメンタリーだ

りにくい。「けなしつ」褒める」という独特の語法とおり、この町医者

は普通の町医者とは違つことを飄々として演出過剰とも思えるフレンドリーさをこなしつつ、その医者は尼崎市の開業医、長尾和宏さん。患者に圧迫感を与えたくないから、白衣は着ない。長尾医師の哲学は簡潔だ。枯れるように死ぬ、それでもできるだけ自宅。終末期は患者が思うように過ごし、医者は投薬やむやみな延命措置は取らない。たとえは、癌

患者に酸素や栄養を与えることは癌細胞にも栄養を与えていることになる。だから、むやみな点滴は避けるべきだ、という理屈になる。長尾医師は在宅患者の往診要請に24時間体制で応じているので、愛車のベンツに乗っているときも常にハンズフリーで電話し続けている。長尾医師があまりにもユーモラスで楽しい人なので、見ているこちらもいつい画面に向かってツッコミを入れたくなる。運転場面では「あー、頼むから片手運転はやめて！うわ、今度は両手を離れたやんか！長尾先生、安全運転してやあ」。

診察室で「今度、コンサートするねん。来てや」と、「一人紅白歌合戦」の宣伝チラシを患者に配っている場面では、「診察室で宣伝してどうするねん！ やりすぎやろ」。で、そのコンサートではしっかりステータス衣装を着てカッツも着用す

る。その様子に、「うわ、マジで歌手のつもりか、ハンパないなあ」と、満席の観客の大喜びの様子を見ながら私も笑う。全編こんな感じの楽しいドキュメンタリーだ。

しかし、エンタメ映画の場面ばかりではない。カメラは患者の自宅に入り込み、たまたま今亡くなった老人の遺体を映すし、医療の現状に警鐘を鳴らし、なぜこのような在宅診療の道を選んだのかという長尾医師の自説も開陳していく。

映画はエンドクレジットの後、16分も続く。ここがまさにクライマックスだ。目の前で亡くなっていく患者とその家族の表情を映し出すカメラ。家族が臨終に間に合うようにと懸命に心臓マッサージを続ける長尾。この緊迫の場面は必見のうえにも必見。人が死んでいくという尊厳ある時間をカメラが追った貴重なドキュメントだ。エル・ライブラリー

(大阪産業資料館)

館長 谷合佳代子

▼公開日/2月26日(金)

▼上映館/〈大阪〉なんばパークスシネマ

06(6643)3215、

他/〈京都〉京都シネマ

075(353)47

23、〈兵庫〉神戸国際

松竹078(230)

3580、他

22、他(1字×98行)

078(230)

078(230)

078(230)